

人間再発掘シリーズ



5度目の五輪を目指す重量挙げエース 三宅宏実の「いま」

2人の兄を持つ末っ子、三宅宏実(33)いちごは、「重量挙げだけは絶対にやらない」と心に誓っていた。父・義行(73)は1968年メキシコ五輪銅メダリスト、伯父・義信(79)は64年東京、メキシコの金メダリストで、メキシコでは日本の五輪

「重量挙げは絶対やらない」母に。ピアノの指導を受ける



4歳のころの三宅宏実。末っ子として育った

史上歴史的快挙となる兄弟同時に表彰台に立ったレジェンドである。長男、次男ともに重量挙げの全日本代表の選手で、幼い頃から試合を応援に行っていたので仕組みや動作といった素養はあっただろう。むしろ、重量挙げを選択しない方が難しいとさえ思えるそんな環境にありながら、それでもバーベルに背を向けた。埼玉県・新座第二中学に入学すると、最初は手芸部に入った。「バーベルを持ち上げる様子は私にとっても男っぽいな」が通っており、宏実もその1人となったが、母と始めた最初教室に通うほかの子どもたちには優しく、根気よく教える母が、いざ自分のレッスンとなると変わってしまった。母の厳しい指導以前に、ピアノが自分にとって熱中できるものとは思えなかったため、興味は少し薄れていく。しかしピアノを辞めたからといって、同級生たちのように「将来は…」と、誰かに語れるほどまぶしい夢も持っていない。「夢を持ってない自分が嫌いでした」そう振り返る。

今回の取材で、育代は「娘となる」といつい熱が入ってしまい厳しくなると反省しています。将来はピアノが、自身と家族の運命を新たな方向へと導くことになる。敬称略

【デイリースポーツ制定「ホワイト・ベアスポーツ賞」受賞者編】

「女性らしい繊細な何か」については、母・育代も大賛成だった。女の子で末っ子、将来は自分と同じように音楽を志してほしいとピアノを教える。育代が開いていたピアノ教室には大勢の子どもたちが通っており、宏実もその1人となったが、母と始めた最初教室に通うほかの子どもたちには優しく、根気よく教える母が、いざ自分のレッスンとなると変わってしまった。母の厳しい指導以前に、ピアノが自分にとって熱中できるものとは思えなかったため、興味は少し薄れていく。しかしピアノを辞めたからといって、同級生たちのように「将来は…」と、誰かに語れるほどまぶしい夢も持っていない。「夢を持ってない自分が嫌いでした」そう振り返る。